

戦時期日本・アフガニスタン関係の一考察

—外交と回教研究の間で

白 杵 陽

一、はじめに—尾崎三雄がアフガニスタンに滞在した時代

(一九三五年九月—三八年九月)

本論は農林省技師・尾崎三雄^①(一九〇二—八五年)を通して戦時期の日本・アフガニスタン関係の一側面を考察することを目的としている。

本論で言う戦時期とはいわゆる十五年戦争、すなわち一九三一年の満州事変勃発から一九四五年の敗戦までを指している。尾崎は一九三五年九月から三八年九月までの約三カ年間、アフガニスタン農商務省招聘の農業技師として首都カーブルに滞在したが、その時期は日中戦争の勃発を伴っており、日本・アフガニスタンの両国関係が大きく変化する激動の時代であった。尾崎はアフガニスタン滞在中、アフガニスタン関係の資料を収集し、また日誌とファイルドノートを残し、さらに当時のアフガニスタンの風景を撮影し、数多くの写真をわれわれに伝えており、それらの資料は山口県防府にある旧宅に所蔵されている(以下、資

料等を「尾崎家資料」と呼ぶ)。尾崎家資料はアフガニスタンの地域研究にとって貴重な資料であり、とりわけ撮影した写真は当時のアフガニスタンを知る上でも国際的なレベルから見てもきわめて重要な第一級の画像資料であると思ふことができる。

さて、尾崎三雄は日本に帰国した翌一九三九年に「農業を通じて見たアフガニスタンの断片^②」という論考を執筆した。その論考は回教圏研究所(当時の名称は回教圏攻研究所)が刊行していた雑誌『回教圏』の巻頭論文として掲載された。その号を飾る巻頭のグラビアにも尾崎自身が撮影した写真六枚が「アフガニスタン片影」と題して掲載されている。その論考の「はしがき」は尾崎のアフガニスタン滞在の目的がいかなるものであったかを示すものである。少々長い引用になるが、まずその論考を紹介してみよう。

「アフガニスタンに滞在すること三ヶ年、その後カシミール藩王国、北インド地方、イラン、イラク、シリア、トルコ等中央アジアの回

教徒居住地方を旅して見て、これらの地方における農業生活の様式あるいは農業の形態が、われわれの普通の経済学的常識あるいは農学的常識をもってしては、理解できない数多くの事実が存在するのに気が付く。たとえば中央アジアに多く生計の途を求めているノーマッド (Nomad 遊牧民) の牧羊生活は、経済生活発展の過渡期にある(と一応は考えられるが、果して発展の過渡期にあるのかあるいは一つの型に於て固定しているのか、更に歴史的事実を考証する必要がある)がための混乱状態にあるだけでは説明し切れないほど、孤立家族経済的色彩の濃厚な市場生産経済生活を営んでいる。この理由を何処に求むべきであろうか。これら地方における生産の三要素が具現するその本質的な特異性に基くことはもちろんであろうが、その回教的掣肘に起因する発展形式の変調も見逃し得ない理由であろう。

中央アジア回教徒居住地方における住民の経済生活状態を調査研究して、これを学術的に体系付けることは、将来この方面に伸びんとするあらゆる事業に対して、正しき方策を樹立せしむる指針を与うるものとして、なされなければならない焦眉の緊急事であろう³³」。

尾崎はこの一節においては「遊牧民」に注目し、若き農業技師としてアフガニスタン農業の理論化に向けての学術的な関心を表明している。

もちろん、この一節からはアフガニスタン情勢への政治的な関心はまったく感じられない。尾崎自身が農林省技師としてアフガニスタン政府の要請によって派遣されたのは、日本とアフガニスタンの両国のあいだの外交関係が樹立されて、両国関係をいっそう強化・促進するという文脈においてであった。したがって、尾崎のアフガニスタンへの同政府による招聘は尾崎個人の主観的意図とはまったく別の次元の当時の日本の国

益追求に沿った出来事であった。

本論ではまず、尾崎が派遣された時期、すなわち一九三五年九月から一九三八年九月という約三年間の時期に注目しつつ、なぜ尾崎がアフガニスタンに派遣されたのかについて考えてみたい。というのも、尾崎のアフガニスタン滞在が三年目に入ろうとする一九三七年七月七日に勃発した盧溝橋事件、すなわち日中戦争の勃発が、日本・アフガニスタンの両国関係を大きく変えていくことになるからである。結論を先取りすれば、戦争勃発によって尾崎がアフガニスタン政府に招聘された理由そのものがアフガニスタン側で意味をなさなくなってしまう事態が現出するのである。次に、当時の日本の回教・回教徒研究におけるアフガニスタンの位置づけを踏まえた上で、日本とアフガニスタンとの両国関係を、より広い国際関係の中で、とりわけアジア歴史資料センターのウェッブサイトで公開されている当時の外交文書的一端を垣間見ることと第一の論点と関連させながら在アフガニスタン日本国公使館の見たアフガニスタンの位置づけについても検討してみたい。

二、日本・アフガニスタン修好条約締結(一九三〇年)

— 尾崎三雄が派遣された政治的背景

アフガニスタンは第一次世界大戦後の一九一九年に正式に独立を達成した。アフガニスタン近現代史は一九世紀以来、英露間の帝国主義的対立に翻弄された歴史であった。一八三八年にロシア・イラン連合軍がヘラートに侵攻し、それに対して英領インド軍の支援を受けたアフガニスタン軍が撃破して以降は英露対立が激化していく一方で、イギリスとアフガニスタンとの関係も緊張していく。すなわち、一八三八〜四二年に

第一次イギリス・アフガン戦争が勃発し、一八七八〜八〇年に第二次イギリス・アフガン戦争、そして一八九三年にアフガニスタンがイギリスとデュラント協定を締結して、アフガニスタン・英領インドとの国境、すなわち、現在のアフガニスタン・パキスタン国境が確定した。そして第一次世界大戦後の一九一九年に第三次イギリス・アフガン戦争が起こり、その結果、アフガニスタンはようやく念願の独立を達成する。

独立アフガニスタンはその後、イギリス、ソ連、ドイツ、フランス、イタリヤ等の諸列強と外交関係を開いて、当時のアジアの大国であった日本とも修好条約の締結と外交使節を交換する意向を持つに至った。しかし、すぐには実現せずに紆余曲折を経て、アフガニスタン国王としてナーディール・シャー（一八八三〜一九三三年、在位一九二九〜三三年）が即位してようやくロンドンで日本との折衝が行われ、一九三〇年十一月にアフガニスタン・日本修好条約の調印に至ったのである。そして翌年七月には批准書の交換が行われた。^④
同修好条約は次の四条項からなる。

第一条 締結国ノ各一方ハ外交使節ヲ他方ニ置クベシ

右使節ハ左記ノ者ヲ包含スルコトヲ得ルベシ

- 一、特命全權公使一名又ハ該職ガ一時欠クルベキコトアル場合
ニ於テハ臨時代理公使一名

二、公使館参事官一名

三、公使館書記官数名

四、通訳官数名

五、公使館付陸軍武官一名

外交使節ノ長及前記諸員ニシテ代表セラルル国ノ国籍ヲ有

スベキ者ハ国際法ニ依リ認めラレ、又認めラルベキ権利、特権、特典及免除ヲ享受スベシ

第二条 日本国政府及「アフガニスタン」政府ハ両国間ノ通商条約

ノ締結ノ為成ルベク速ニ商議ヲ開クベシ

第三条 締結国ノ一方ノ臣民ハ他方ノ法令及規則ニ従ウノ条件ノ下

- ニ（イ）其ノ領域内ニ到リ、旅行シ及居住スルノ完全ナル自由ヲ有スベク且（ロ）右領域内ニ於テ其ノ身体及財産ニ付完全ナル保護ヲ享受スベシ

第四条 本条約ハ批准セラルベク且批准者ハ成ルベク速ニ「ロンドン」ニ於テ交換サラルベシ

アフガニスタンは一九三〇（昭和五）年十一月十九日、ロンドンにおいて締結された修好条約締結以来、日本との間に外交使節の交換を実現すべく努力をしてきたが、日本側が緊縮財政の政策をとったという事情もあってなかなか実現されなかった。しかし、アフガニスタン側は一九三三年十月に東京に公使館を開設して、公使を派遣してきた。一九三四年春にはアフガニスタン政府はハビブツラー・タルジイ公使を通じて、日本からの土木、堰堤、農業などの技師招聘の希望を申し入れ、その斡旋を要請してきたのである。その結果、日本もアフガニスタンに公使を派遣することとなり、一九三四年十一月、北田正元（一八八八〜一九七八年）が初代公使としてカーブルに赴任し（一九三八年三月まで在任）、日本公使館が開設された。日本側は公使赴任後、技術招聘に関する交渉をカーブルに移して行った。そして一九三五年には土木、農業の技師がまずアフガニスタンに赴き、続いて林業、建築の技師や農学校教師などが相次いで招聘され、一時はアフガニスタン政府の招聘外国人のうちで

日本はトルコに次ぐ多数を占める状態にあったという。⁵⁾

以上のような経過で、尾崎三雄は一九三五年十月、農作物病害虫駆除予防専門の農業技師としてアフガニスタンに派遣されたのである。また、土木技師としては内務省から池本泰兒（一八九九年生。熊本高工卒）が一九三五年七月、尾崎よりも一足早く日本を發つたのである。

北田初代公使に続いて一九三八年に着任した守屋和郎（一八九三〜一九七七年）公使は、その離任後ではあるが、大東亜戦争勃発直前の一四一年十一月に『アフガニスタン』と題する概説書を出版し、その中で次のように公使館開設の意義を振り返る。

「日本とアフガニスタンとは昭和九年以来公使を交換して居る。爾來兩國の關係は益々緊密を加えている。外交關係設立以來兩國の間に一度も悪感情の対立をみたことのないのは兩國政府及國民が互いに深く諒解し信頼して居る結果と見るべきである。（中略）扱て、アフガニスタンが我國と公使の交換をして居ることは、兩國に取り大いに意義のあることは勿論である。先ず第一に、東洋に於て國をなす回教圏に非ざる國家にして、アフガニスタンと外交關係を有する者は独り日本のみである。支那とも此のことはない。泰國ともない。日本はアフガニスタンにおける仏教國の代表者でもあり、アジアに於ける非回教的獨立國家の代表でもある。第二に日本とアフガニスタンとは、共に強國と相對立し、一日も油断はならない地位に居る。日本は過去數年間外交上に於て英國及ソ連邦と對立的地位に在り、現在蔣介石と戰うについては英國もソ連も財政上及軍事上蔣を援助して日本に当らしめて居る。アフガニスタンは英ソ兩國の間に介在して長く英ソから圧迫せられ、第一九世紀には北方で帝政露國、南方で英領印度に依り国土の

過半を奪われて了つた。現在アフガニスタンは完全なる獨立國となつて、自力を以て富國強兵に邁進して、失地の回復は願わないうして、も往年の英露角逐に依り受けたる創痍を何等かの方法を以て治療し、且つ將來絶對に國土を他國に依つて侵食されぬ様にしよと考へてゐるのではなからうか。⁶⁾

守屋はさらに、第三として「アフガニスタンは尚武の民を有する」とし、さらに第四として「アフガニスタンの強兵富國の政策實現の爲には、日本に学ぶ」ところがあるとも指摘している。その上で次のように述べる。

「以上の如き根底が日ア關係に就て存するものとすれば、日本及日本國民はアフガニスタン及び其の國民に対して深き理解と友情を持ち、兩國の友好關係を益々強化していかねばならぬ。唯單に通商的利益關係のみを基礎として開始された國交と同視し、日ア關係を通商的利益からのみ律して行くことは、多くなる誤りと私は考へる。若し夫れ強國アフガニスタンが我國との友好を維持して英ソ兩國の間に介在することが、兩國に取りて如何なる意義を持ち得るかに至つては茲に贅言をする必要もないであらう。⁷⁾

守屋公使は以上のようにアフガニスタンについて記述しているが、外交官としてある種の理想主義的な友好關係と相互理解に基づく發想は、後にしばしば引用することになる北田公使の現実主義的な戰略思考の傾向とは對照的であり、大きな隔たりがあるかにも思へる。もちろん、北田公使も『文藝春秋』誌に「友邦アフガニスタンより歸りて」と題して

二回にわたり寄稿して、アフガニスタン滞在の体験記を認めてはいるが、本論の関心からは内容的に離れているのでここでは引用はしない。

三、戦前日本の「回教徒問題」におけるアフガニスタンの位置づけ

本論冒頭において回教圏研究所の雑誌『回教圏』に掲載された尾崎論文の冒頭部分を紹介したが、回教圏研究所長の大久保幸次（一八八七—一九五〇年）は当時の日本の回教・回教徒研究をリードするトルコ研究者であった。大久保が『アジア問題講座』第三巻の「政治・軍事篇（三）」において「回教徒問題」という論考を寄稿している。当時の日本においては「回教徒問題」を解決するために回教・回教徒研究が焦眉の急として推進されなければならないと考えられていた。その際、大久保は「回教徒問題」が大東亜共栄圏構想を実現するために非常に重要な要因であることを前提とした上で英仏蘭露の植民地支配下にある回教圏に注目していた。とりわけ回教圏における数少ない独立国としてのアフガニスタンの重要性を次のような人口統計上の観点から指摘している。

「世界三億の回教徒の中約一割は支那各地に居住し、七割はヨーロッパ列強の支配下に置かれていることがわかる。そこで爾余の二割が独立国に散布されているわけである。その独立国は、先ず、アジア、ヨーロッパ両大陸に跨がるトルコの約一千七百万人を初めとして、アジアではイランの約一千三百万人、アフガニスタンの約一千万人、サウド・アラビアの約四百万人、イエメンの約三百万人、シリアの約二百万人、それからアフリカではエチオプの約一千四百万人がある」。

大久保の指摘を待つまでもなく、アフガニスタンはトルコ、イラン、エジプト、サウジアラビア、イエメンなどとともに当時の中東地域における独立国の一つとしてその外交上の重要性は看過できないのであった。とりわけ、アフガニスタンはトルコ、イランとともに旧ソ連と直接国境を接する戦略的にも重要な回教圏の諸国家の一つであった。もちろん、日本とアフガニスタンとの政治的な蜜月は一九三六年のアフガニスタン協会（初代会長は北田正元・初代駐アフガニスタン公使）の設立に象徴される。しかし、両国関係もその後の国際情勢の激変に翻弄されたのである。

第二次世界大戦後に展開した日本の地域研究の観点から言えば、学術的な研究対象としてのアフガニスタンへの関心はそれほど高いものとはいえなかった。もちろん、アフガニスタン関係の概説的な書籍やパンフレットの類は公使館勤務の経験がある外交官などを著者としてそれなりの点数が出版されたことはいうまでもないことである。その詳細については、前田耕作監修、関根正男編『日本・アフガニスタン関係全史』（明石書店、二〇〇六年）における第二章「国交開設へ」および第三章「国交開設から敗戦」に述べられているので、同書を参照していただきたい。

しかし、当時においても高い水準の学術雑誌として定評のあった『回教圏』（回教圏研究所発行）においてはアフガニスタンそのものに関する論考は翻訳が一本掲載されているのみだった。¹⁰ また、尾崎三雄と同時期に在カーブル日本公使館の書記生としてアフガニスタンに滞在した小川亮作（一九一〇—一九五一年）が数本の論考を寄稿している。しかし、小川が投稿したのはアフガニスタン情勢を分析した論考ではなく、戦後になって岩波文庫にも収められて現在も読み継がれてロングセラーとなっ

たオマル・ハイヤームのベルシア語詩『ルバイヤート』に関するものがほとんどである。さらに、「カプール綺譚二篇」と題して「怪蛇ユーハー」と「アフガンの幽霊」を紹介している¹⁴⁾。

前述の関根正男編『日本・アフガニスタン関係全史』はアフガニスタンに関する分析について次のように指摘している。すなわち、「アフガンについて本格的な分析を加えたのは大川（周明）が初めてであり、前述書（『復興亜細亜の諸問題』一九二二年引用者注）のなかで、第五として「アフガニスタンおよびアフガン問題」を取り上げている¹⁵⁾。大川周明の名著『復興亜細亜の諸問題』における第一次世界大戦直後のアジア情勢の分析は現在の研究水準から見てもグローバルな視点をもった「地域研究」の先駆的な作品として優れたものであった。周知のように、大川は研究管理職的な立場から満鉄傘下にあった東亜経済調査局理事長として活動したばかりではなく、戦時中には名著の誉れ高い『回教概論』を出版し、戦後東京裁判の被告として免責されてから治療を行なった松沢病院において『古蘭』の完訳を刊行するなど、日本の回教研究においては忘れてはならない特筆すべき人物である。しかし、大川の回教研究について現在に至るまでまだその研究は十分とはいえない¹⁶⁾。それはともかくとして、大川主宰の東亜経済調査局が刊行していた『新亜細亜』には尾崎三雄を含めてアフガニスタンに関する論考が掲載されている¹⁷⁾。

他方、回教圏研究所が大東亜戦争勃発後の一九四二（昭和一七）年十一月に刊行した『概観回教圏』においてもその第十章で「アフガニスタン」を取り上げている。同章の執筆者は当時東京外国語学校教授として教鞭をとりつつ回教圏研究所の所員でもあった蒲生禮一（一九〇一〜七七年）であった。もちろん、蒲生のような言語・文学の専門家がこのような概説を書かざるをえないところに開始されたばかりの、当時の貧弱

なアフガニスタン研究の状況が反映されているともいえよう。いずれにせよ、同書は概説書であると同時に簡単なガイドの役割をも果たしている。同書では「自然環境」「民族的発展の複雑性」「英露との関係と国民の覚醒」「回教主義の確立」「経済界の現状」という節が立てられている。そのうち「英露との関係と国民の覚醒」に記述されている「外交関係」を見ていると、以下のようなアフガニスタンを取り巻く国際環境に関する叙述が見出される。

「元来英露二大勢力の中間に挟まれて存在するこの国の独立性に、少なからぬ脆弱性の存在して居る事は何人と雖も認めざるを得ない。現在の状況から見て、この国には強力な独立国家として持つべき条件に欠ける点が多い。従って従来アフガニスタンは英露の対立を巧に利用し、時にイギリス方に傾き、また時にはロシアに縋るが如き態度を採らざるを得なかつたわけである。そもそもロシアの南下政策は伝統的に根強いものである。またイギリスにとつてはそもそも宝庫たるインドに対するロシア勢力の南下は、自国の安全と存立とに直に影響を及ぼすものであるが故に、ロシア勢力の南下防遏（ぼうあつ）に対しては歴史の示すが如くあらゆる努力が続けられて来たのであった。従ってアフガニスタンを完全にその勢力下に置く事は、英露いずれにとつても国策遂行上常に緊要なる問題であつたので、アフガニスタンを繞る右両国の角逐こそ、この国の近世史を構成する要素であるといつても過言ではあるまい。故にこのような状態にあつたアフガニスタンの当局者が、イギリス依存の態度を鮮明にしたときにはロシア側の怒を招き、ロシア依存の態度を露靴にしたときには、イギリス側の報復的策動に遭遇しなければならなかつたのは当然である¹⁸⁾。」

以上の英露関係の中のアフガニスタンの地政学的な位置づけはおおむね日本の官民を問わずアフガニスタン関係者にとつては共有された認識であったといえよう。むしろ、その独立国間の地域政治における注目の方が今日的な観点からは重要な視座を提供する。すなわち、蒲生は続けて「近代化」という項で次のように述べる。

「かような国際的不遇にも拘らずアフガニスタンの近代化も他の回教諸国と相並んで次第に進められ、英ソ両国による脅威をば国家存立を危うくする共同原因と思惟する隣接回教諸国との提携策も講ぜらるるに至つた。すなわち、アフガニスタンは一九二一年にはトルコと攻守同盟を結び、イランとは同年六月に外交使節交換の条約、ついで一九二二年九月にはこれと友好中立条約を結び、更に一九二七年、同二年には上記両条約を更新した。一九三七年の回教国四国を連ねるサアダーバード条約に就いては今更いうまでもない。アフガニスタンはイラクを通じて、サウド・アラビアとも連繫を保っている。こうした他の回教国との善隣関係はたんに政治的の意味ばかりではない。とくに先進国トルコとは、文化発展の助力者として特別な関係に結びついている。ことに、アフガニスタンにおける陸軍とおよび医術は殆んど全くトルコ人の指導のもとにたつていたのである。」¹⁶⁾

以上のようなアフガニスタンの重要性の認識は、図式的に言えば対ソ連¹⁷⁾対共産主義の対抗関係において捉える見方にも認められるものである。回教世界に対してその推進役となった大日本回教協会は、共産主義への防波堤としての中国、中央アジア、西アジアにおける回教徒を次のような戦略的認識をもって捉えているのである。

「わが對アジア政策上からみれば、大体において、印度、アラビア及びマレー系の回教徒は英国及びその配下たる和蘭の覇権下になるので、對英政策上の対象として考へられ、また支那及びトルコ系回教徒はソ聯の共産主義の桎梏下に喘いでいるので、對ソ政策上重要な対象と云へよう。吾々が防共政策上の対象とすべき回教徒は主として後者である。∴防共の盟邦滿洲帝國、蒙古防共自治國、西北防共回教自治國等これらを貫く東亜防共聯盟の結成、これを更に延長して中部及び南部アジアの回教徒及び回教國集團と連結することに依つて、はじめて眞の意味において極東と近東とを繋ぐことが出来、皇國と回教國とを結ぶことが出来るのである。そして、その線を確保することは、防共政策、回教政策、アジア民族解放政策を實踐する上に必要であるのみならず、對支、對ソ、對英政策を遂行するため最も重要なものである。」¹⁷⁾

当時、大日本回教協会の理事であつた松島肇は次のように協会設立の目的を述べる。

「我等ハ回教問題ノ根本的調査研究ヲ行ヒ我國民ニ回教諸國ノ実情ヲ知ラシムルト共ニ世界ノ回教徒ニ向ツテ我國文通ノ真相ヲ傳ヘ相互ノ通商貿易ヲ助長シ以テ彼我ノ親善關係ヲ増進シ併セテ世界ノ平和ニ寄與スルトコロアラントス」¹⁸⁾

なお、松島肇は一九三五年、インド近東諸国への外遊巡回使（特命全權大使）としてアフガニスタンにも訪問するとともに、中東諸国ではイラン、トルコ、シリア、パレスチナ、イラクをも歴訪している。

先に日本・アフガニスタンの両国関係も国際情勢の激変に翻弄されたと述べた。すなわち、一九二九年の世界恐慌を契機とするブロック経済化によって日独伊という枢軸側による攻勢が始まり、それに伴って英仏ソが主導権を握ってきた国際情勢が一九三〇年代に入って急変していくのである。とりわけ、第二次世界大戦勃発前夜である一九三〇年代後半という時期は決定的に重要である。日本が当時のアフガニスタンをめぐる状況をどのように認識していたかの一端を東亜研究所が刊行した報告書を通して垣間見てみたい。

当時のアフガニスタンに関する現状分析としてわれわれが目にするこ
とのできる報告は、東亜研究所第五部二班西アジアに所属した村田昌三
による一連の報告書である。村田昌三による報告書は時期的には一九四
〇（昭和一五）年以降に刊行されたものばかりである。具体的には、村
田昌三編『アフガニスタンニ於ケル大戦後ノ國際關係・未定稿』東亜研
究所資料乙第一四号C、一九四〇（昭和一五）年、をはじめとして、村
田昌三『アフガニスタンを繞る列強の争覇』東亜研究所資料乙第三八号
C、一九四一（昭和一六）年五月、『印度・アフガニスタン国境―その紛
争と民族』東亜研究所資料乙第三七号C、一九四一（昭和一六）八月、
『アフガニスタンの諸民族』東亜研究所資料乙第四七号C、一九四二（昭
和一七）年一月、などがある（ちなみに、村田昌三はアフガニスタン以
外にもイエメンとハドラマウトの概況に関する報告書も東亜研究所で執
筆している）。

とりわけ、報告書のうちで『印度・アフガニスタン国境』は今日的な
観点からも重要な意味を持っている。当時の日本にとってアフガニスタ
ンとの貿易はインド経由がほとんどであったが（一部はイラン経由）、そ
の際、インド人商人による交易独占という問題のほかに（当時の在アフ

ガニスタン日本公使館からの電報の案件の多くがアフガニスタンとイン
ドの貿易、あるいはインド人商人をめぐるものであった）、カイバル峠を
中心とするアフガニスタン・インド国境問題は非常に重要な問題であっ
た。村田はその緒言において次のように述べている。

「英国は、一七六五年、印度のベンガル州に於て、その地歩を確立し
て以来、一世紀に満たない時日の間に、全印度、バルチスタン、ピル
マ、及びそれに隣接する諸地方をその手に収めるに至つた。即ち、英
国の南アジアに於ける侵略は、ベンガルを足場に、且つ之を中心とし
て、随所にその東西に拡げられて行つたのである。併し、この燎原の
火にも比すべき勢力も、英国が夙に希望していたトルキスタンにはお
ろか、アフガニスタンにすら達し得ずして熄んだ。これは、一つには
英国のこの膨張と相前後して盛んとなった露国の南下の勢いに阻まれ
たことにも因るが、より顕著な理由と看做し得る更に一つの事実があ
る。それは実に印度とアフガニスタンとに跨っている峻険極まりない
山岳地帯と、この地帯に居住する勇猛、果敢な戦士の種族との二つの
障壁的存在であった。この両者が相俟つて、如上の英国の勢力進展を
阻止したものと見てよからう」²⁰。

この山岳地帯という自然条件と勇猛果敢な戦士たちという二つの要因
が英国のアフガニスタンへの侵略を阻んだとした上で、山岳地帯の状況
がどんなものであったのかを問う。

「然らば、右山岳地帯は如何なる状態にあつたか。其処に住む種族
は如何なる状態に在り、且つ在つたか。之に対して英国は如何に対処

したか。その背後にあったアフガニスタンは如何なる態度に出たか。本稿に於ては、之等の諸問題に付いて、地理的、歴史的に説明を試みた⁽²¹⁾。

以上のように、村田はこの国境問題へのアフガニスタンの対応を地理的、歴史的に説明している。同じような関心に基づいて執筆し、ほぼ同時期に出版された『アフガニスタンを繞る列強の争覇』でも次のような地政学的な問題関心を提示している。

「アフガニスタンがイギリスとロシアの勢力の間に圧縮せられて、その均衡の上に辛うじて存在をつづけて来たことは周知の事実である。本稿はその前編において、この両国がアフガニスタンをはさんで角逐した経緯を、アフガニスタンの内部情勢と、この両国がアジア各地においてその勢力を争った諸種の事件との関係において歴史的に検討を試みたものである。後編においては、第一次大戦後、わが国を加えた列強がアフガニスタンに如何に進出したを具体的な事実について概説した⁽²²⁾」

四、一九三〇年代後半におけるアフガニスタンでの日本の

情報戦略

先に述べた東亜研究所はそもそも一九三八年に設立された民間の財団法人であったが、設立そのものは軍の方針によるものであり、その運営は企画院の指導監督の下にあったので、村田昌三の報告書が政策決定にかかわる関係省庁の官僚の担当官に読まれたのであろう。すなわち、ア

フガニスタンの地政学的重要性は外交の現場でも共有されていると見てもいい。

アフガニスタンの現場に初代公使として赴任した北田正元も同じような関心を示している。すなわち、北田公使は尾崎三雄の赴任直前の一九三五年八月八日付の極秘電第六九号において、イギリスの諜報機関への関心を示しつつ、アフガニスタンを取り巻く国際情勢を次のように分析して見せる。

「当方面の最近情報ヲ総合スルニ、英国ハ日本牽制策トシテ専ラ米
国ヲ利用シ、蘇連邦ニ対シテハ積極的ニ働キ掛ケサルカ如ク、独逸ノ
当国ヘノ経済的其ノ他ノ進出ハ昨今顕著トナリ、当国ヲ将来策源地
(主ニ英国流ノ「インテリジェンスオフィス」ノ活動)ニ利用セントス
ルノ底意ヲモ漸ク認メラルル処、同国ハ(脱)仏国ノ地位ヲ弱メル為
「エチオピア」問題ニテニ重政策ヲ採リ伊国を声援スル通り、将来ハ
露国ト妥協シ(所謂「ウクライナ」問題ノ如キ真相注意ヲ要ス)日本
又ハ英国ニ当ラシメテ漁夫ノ利ヲ計ルノ惧モアルコト注意ヲ要ス。独
蘇両国ニハ既ニ当国ニテ隠密ニ邦品排斥宣伝ノ氣勢モ一部見受ケラ
ル。英国ハ対蘇対独関係モ加ワリテ当国援助ヲ進メ今回小銃二万挺ヲ
年賦払ニテ提供シ飛行機モ商談中ナリ。」⁽²³⁾

他方、北田公使は尾崎がアフガニスタンに着任した直後の一九三五
(昭和一〇)年十一月十一日付の暗号電(往電第九一号)を本省宛に送っ
て、アフガニスタンにおける親日的な雰囲気を目撃するとともに、日本
とアフガニスタンとの親交の増進が英ソに対する両国の国際的地位を強
化し、英ソに東アジアにおける日本の地位を尊重させる結果になると指

摘して次のようにも述べる。

「今回ノ旅行ニテ当国力資源ニ恵マレ産業進ミ人民ハ健美、愛国心ニ富ミ親日気分盛ナルヲ実見シタルカ、当国ノ蘇、英ニ対スル關係ニ鑑ミ日阿ノ親交増進ハ双方ノ國際的地位ヲ著シク互イニ強化スベシ。蓋シ蘇英ノ如キ国々ヲシテ我東亞ノ地位ヲ尊重セシムル為ニハ先方ノ好意ヲ繋キ無益ナル刺激ハ避クヘキコトナルモ、他方我ニ於テ極東に實力ヲ有シ且ツ其ノ上彼等ノ弱点ヲ牽制スル手段アルヲ必要トスベシ」⁽⁵⁾

このように北田公使の電文に垣間見ることのできるパワーポリティックスの増埒であるアフガニスタンとの關係強化による國際的地位の強化という戰略的姿勢は次のような本省宛の報告書にも現れている。すなわち、一九三六（昭和一一）年一月二日付「当国内ノ英「ソ」兩國情報機関ノ活動並ニ当館ノ情報事務ニ関スル件」（公機密第一一號）と題する在アフガニスタン公使館の諜報の任務ともいうべき、三三ページにわたるタイプ印刷の報告書である。同報告書は、中ソ、英領インド、イランに隣接し中央アジア地域の國際關係の要のような位置にあるアフガニスタンにおける情報公館としての性格をよく示している。その報告書の内容について若干詳しく紹介してみたい。

同報告書は（一）新疆およびソ連領トルキスタンの直接情報、（二）当国における英ソ兩國の情報機関、（三）当館の情報事務、という三部の構成になっているが、英ソの勢力圏のはざまにあつて第一次世界大戦後、独立を勝ち得て、対英ソ中の戰略上においても地政学的に重要な位置を占めるアフガニスタン王国に新設された公使館の外交的任務を如実に示

すものである。北田公使は本省に対して「今後下記ノ方針ニ依リ之ヲ取扱ヒ度キ心組ニ付右様御含置ノ上今後必要ナル御指示ヲ仰ギ度シ」として情報収集に関する方針に関して本省に書き送っているのである。

まず、アフガニスタンに隣接する中華民國の新疆およびソヴィエト連邦のトルキスタン（中央アジア）について概観しているが、とりわけ後者のソ連との国境に関してアフガニスタンにおけるインフォーマントを出来るだけ早く獲得して国境付近に派遣、情報収集を行うとして次のように述べる。

「新疆及「ソ」領「トルキスタン」ニ関スル情報ニ付テハ当地ニ於テ各方面ヨリ出来得ル限り之カ入手ニ努メ居ル処本件情報ノ蒐集ハ御承知ノ通り極メテ難事ナルモ今後一層最善ノ方法ヲ講スルコトト致スヘク今回始メテノ試ミトシテ一層直接有功ナル情報ヲ得ル為メ極秘裏ニ当地ヨリ適當ナル人物ヲ選ヒ周到ナル用意ノ下ニ之レヲ現地ニ派遣方研究中ナルカ右両地ノ中「ソ」領「トルキスタン」ニアリテハ当国人ノ入国ニ対シ嚴重ナル制限ヲ設ケ、兩國ノ貿易モ国境ノ鉄道駅タル「テルメツ」、「カルキ」「クシユク」等ニ特定ノ場所ニ集中シテ行ハレ、当国ノ關係商人ハ回数往復旅券ヲ与ヘラレ又国境駅付近ノ限ラレタル一定地域内ニハ滞留ヲモ許サルモ、内地ニ旅行滞在スルニハ特別ノ手續ヲ要シ許可ヲ得ルコト容易ニアラス。又偶々通過旅行ヲ許サルルモノモ多クハ官吏其他公ノ目的ヲ有スルモノニ限ラレ、而モ是等ノ者ト雖モ汽車ニテ目的地ニ直行ヲナス以外各地ニ濫リニ下車滞在スイルヲ禁セラルル次第ナリ。然レ其他方「ソ」領「トルキスタン」ト当国領「トルキスタン」トノ間ノ国境線ハ「ハナバッド」「マサリシヤリフ」方面ニアリテハ「アム、ダリヤ」河ヲ隔ツルモ兩國共国境ノ監視

ハ広キ全線ニ亘リ約五里乃至十里毎ニ守備兵ヲ配置シ居ルニ過キサルヲ以テ固ヨリ全国境ニ亘ル完全ナル見張りハ不可能ニテ殊ニ夜間ニアリテハ監視ヲ潜リテ秘密ニ交通行ハレル⁽²⁶⁾。

さらに日本公使館の情報事務については開設したばかりで情報体制が不十分であり、次のように整理する。

「当館ハ現在開館日尚浅ク未ダ開拓時代ニ属スル処、当国ハ御承知ノ通り中重二位シ特殊語学国タル上、人文未ダ普及セス。現在ニテハ読ミ書キノ出来得ル男子ハ全男子人口ノ数「パーセント」ニ過キス、英、仏、独、露語ノ如キニ至リテハ僅カニ大臣高官中ノ一部ノモノ少数外人ノ間等ニ通スル程度ニテ一般人民商人等ハ特別ノ場合ヲ除ク他全然之ヲ使用セス、新聞雑誌モ僅カニ一二ノ「イラン」語文字ノモノ發行アルノミヲ以ッテ当地ニ於ケル情報蒐集ノ困難ハ想像以上ナリ、殊ニ当館ノ如キ創設時代ニハ万事ヲ新タニ創始シ、組織ヲ整エサルヘカラスルニ拘ラス当国内ノ事情ハ他所ト異リ了解モ容易ナラス、殊ニ人事関係ニ付イテハ深キ注意ヲ要シ、就中民間情報機関ヲ作ル場合適当ノ手掛リヲ得ルコト頗ル困難ナリ⁽²⁷⁾」。

北田公使は「当地に於ケル情報獲得ノ方法トシテハ大体左ノ三種アリ」として情報獲得の方法として(イ)アフガニスタン政府筋、(ロ)在アフガン外交団、そして(ハ)民間関係、の三種を挙げる。アフガニスタン政府筋に関しては次のように述べる。

「政府筋ハ最モ重要ノモノノ一ナルカ其ノ中我方ト関係深キハ総理、

陸軍、外務、大蔵、農商務次テ郵便電信、衛生、土木、文部、司法、宮内ノ各大臣、国立銀行、上下両院議長等ナルカ、当国人ハ御承知ノ通り従来欧州諸国人ノ間ニ於テモ猜疑心最モ深く容易ニ真実ヲ語ラサル国民トシテ喧伝セラレ居ル程ナルカ、右ハ大部分外国ノ悪宣伝ナルモ当国人ハ西欧ノ事物ニ付イテハ知識少ク過去ニ於テモ屢々外人ヨリ欺瞞セラレタル経験モアリ、勢イ余リ親シカラサル人ニ対シテハ警戒ノ態度ヲ採ルハ已ムヲ得サル所ナリ⁽²⁸⁾」

二番目の在アフガン外交団については次のように述べる。

「外交国及其ノ居留民ハ固ヨリ当地ニ於ケル重要ナル情報ノ源ナルト同時ニ常時之レ等ト良好ナル連絡ヲ保ツコトハ当館ノ任務ヲ果タス上ニ種々影響アリ。殊ニ当地ニアル各国大使館及其ノ居留民ト当国トノ間ニハ各々特殊ノ関係モアルヲ以テ此点ヲモ良ク考量尊重スルコト肝要ナリ、就中当国ト英「ソ」トノ関係ハ最モ重要ニシテ我方ニ取テモ当国トノ政治通商上ニモ影響ヲ及ホス問題ナルカ、当国政府ハ「ソ」英何レニ対シテモ独立ヲ保チ其ノ間隙モ特殊関係ハ存在セス(世人往々現王朝カ印度政府ヨリ年金ヲ受領シ居ルカノ如ク噂スル向アルモ事実ニアラス)。」

さらに第三番目の民間関係に関しては次のように述べる。

「当国ノ政府及人民ノ英国ニ対スル反感モ相当普遍的ナルカ唯英「ソ」兩國トノ関係ヲ同時ニ悪化セシムルコトハ自滅ヲ招クコトトナルヘキナリ。当国ハ「ソ」連ノ政策、国情、文化、歴史、経済、貿易、

主義等二顧ミ之ニ対シテハ場合ト必要ニ応シテハ如何ナル強硬ナル態度ヲ持スルモ敢テ辞セサルヘキモノモ、英国ハ印度ニヨリ当国ト欧亚大陸トノ重要交通路ヲ扼シ之レカ閉鎖ハ当国ニ容易ナラサル事態ヲ持チ来スコトトナルヘキモノナラス英国ハ「ソ」連トハ異リ平和的ニテ危険性少キ關係モアリ。結局当国トシテハ現在ノ如ク日本トハ直接連絡モ未ダ出来ズ無海港ノ状態ニアリテハ印度ノ英国權力ノ続ク限り「ソ」連ヲ敵トスルコトアルモ、之ト同時ニ英印ヲモ敵ニスルカ如キ事態ノ發生ハ之ヲ避ケサルヘカラサルノ状態ニアルモノナリ。

民間關係ノ情報ハ当国ノ如キ土地柄ニアリテハ極メテ重要ニシテ唯表面ノ事象ヲ見ルノミニテハ容易ニ機微ヲ把ヘ得サルナリ、「ソ」英ノ諸活動ヲ始メ当国ノ内情ヲ了解シ進テ新疆、「ソ」領「トルキスタン」、印度等ニ於ケル事件ノ表裏ヲ觀察シテ誤リラサル為メニハ右ハ殆ント欠クヘカラスル手段ト認ムヘキナリ。当地ニ於ケル新疆情報ノ尠ナカラサル部分モ南新疆（「ヤールカンド」ヨリ「カシユガル」ニ掛ケ約一萬人ノ「アフガン」人定住シ今日迄ハ六十人内外ノ「アフガン」商人新疆貿易ニ従事シ来レリ）ニ出入スル当国人ノ齋スト所ニテ又「ソ」領「トルキスタン」其他ノ内情モ多クハ避難民又ハココニ往来スル商人等ヨリ伝ハルハ勿論当国ノ各要地ニハ種々ノ秘密結社モアリ前記各地ト連絡ヲ有シ新疆、「ソ」連、印度等ニ関スル有益ナル秘報ヲ伝フルコトアリ、右現存組織等ノ詳細ニ付テハ別信ヲ以テ報告致スヘシ²⁰」

また、情報収集のために公使館員を当てる旨を次のように述べている。

当館ニ於テハ開館以來此等方面ノ開拓ニ付考究シ来リタルカ愈々其ノ必要ヲ痛感シタル爲メ今回朝倉通訳生ヲ主任者トシテ之ニ当ラシム

ルコトトシタルカ当地ノ各国大使館ハ何レモ各方面注視ノ的トナリ居ルヲ以テ外交団員以外ハ一般ニ住民ハ勿論外人ト雖モ接近スルヲ避クル傾向アリ、仍テ情報蒐集ノ目的ヲ充分ニ達セントセハ主任者ハ市内ニ居住ヲ構フルヲ必要トスルコト恰モ往時北京ニ於テ我支那語係官ニ対シ公使館以外ノ支那町ニ官舎ヲ設クルノ必要アリタルト事情ヲ同ウスルモノナルカ当地ハ北京等ニ比シ町モ狭ク人ノ噂モ立チ易ク又人民ニハ特別ノ宗教習慣モアル上監視ノ目繁ク且夜十時以後ハ燈火ヲ携帯スルニアラサレハ外出ヲ許サレサルナリ目下朝倉通訳生ハ市内ノ店屋ノ二階ニ間借りシテ「アフガン」弁當ヲ取寄セ夜間当館ノ執務終了後關係者ト面会シ必要ニ応シテハ当国ノ民服ヲモ纏ヒテ人ヲ訪問シツツアル狀況ナリ²⁰」

さらに報告書では「インドにおける情報」として次のように述べている。

「印度自体ニ関スル政治上ノ情報事務等ハ我在印各公館ノ管轄ニ属シ当館ノ任務ノ範圍ニ入ラサルヘキモ印度ハ御承知ノ通り一大大陸ニテ其ノ各地ニ亘ル情報ヲ集ムルハ如何ナル公館ト雖モ相当ノ地理的困難アルヘキナリ

此ノ点ヨリ見ルトキハ西北国境州及「デリー」、「パンジャブ」州方面ハ「カルカッタ」孟買ヨリハ寧ろ当国ニ近ク尚又当国ト印度トノミツセツ關係ヲモ考量スルトキハ当館ニ於テモ印度ニ関スル關係情報ヲ知ルコト任務遂行上必要ヲ感スルモノナリ、殊ニ新疆ニ関スル情報ニ至リテハ「デリー」、「アムリツツア」、「ラホール」、「ベシヤワル」、「カシミヤ」王領方面カ当国以上ノ中心地タルヲ以テ当館ニ於イテモ時ニ

此ノ関係地方面ニ出張シテ努力ヲ試ミ得ルコトトモナラハ相当効果ヲ
取メ得ル様存セラルルニ付イテモ御考量相煩ス様致度シ⁽³¹⁾

一九三六年二月、シダール・ファアイズ・ムハンマド外務大臣がナチス・ドイツを訪問して以来、アフガニスタンとドイツの間の関係が緊密化することになった。すなわち、ドイツ軍将校によるアフガン軍の訓練やドイツによるアフガン警察組織の改革などを通じてドイツはアフガニスタンへの影響力を強めることになった。ドイツ軍として対ソ戦略の一環として独ソ戦になった場合、あるいはイギリスによる対独宥和政策が失敗に終わった場合を想定して、ソ連あるいは英領インドに対する戦略的橋頭堡を築くという政治的・軍事的な意味合いもあった。さらに翌年三七年にはドイツのルフトハンザ航空がベルリン・カールブル間に初のヨーロッパ定期便を開設し、アフガニスタンとドイツとの政治的・経済的関係が目に見えるかたちで深まることになった。⁽³²⁾

一九三六年十一月二十五日には日独防共協定が締結されると時期的に並行して、一九三六年二月、シダール・ファアイズ・ムハンマド外務大臣がナチス・ドイツを訪問して以来ドイツによるアフガニスタンへの関与が活発化する。しかし、アフガニスタン・ドイツ関係は紙幅の都合上、これ以上言及できない。

五、第二次世界大戦直前の国際関係におけるアフガニスタン

—むすびに代えて

日中戦争勃発前に見られた北田公使の楽観的な見通しとは対照的に、一九三七年七月七日に盧溝橋事件、すなわち日中戦争の勃発によってア

フガニスタンと日本との関係が急変することになる。翌日の一九三七年七月八日にはトルコ・イラク・イラン・アフガニスタンの四方国が相互不可侵条約であるサアダーバード条約を締結した。同時代の代表的な中東研究者であった小林元は同条約を「回教の民族主義的意欲と回教徒の近代の再編成とを基調とする『回教諸民族ブロック』と高く評価しつつ次のように述べる。

「回教諸民族を包括する広域生命圏の新秩序は、正しい帰一主義的理念において実現されるべきでありましょう。しかるに、サアダーバード条約において結合するトルコ、イラン、イラク、アフガニスタンは、たとえ多少の差異を露呈しているとしても、全体的にいいますと、中世的格律の残存を浄化し、近代化を敢行する点に関するかぎり、不幸にも、未完遂であります。ことに、これら四国の内外において、ヨーロッパ的触手がいろいろな角度から入り乱れている以上、その未熟性はかならずしもただその角度の異同によってばかり考えられません。つまり、そこは純粋な主体的指向が定立されていないのであります。たとえば、サアダーバード条約の規定を見ましても、それはヨーロッパ主義の追隨的性格が察せられます。すなわち、それは「隣接諸国の友好関係に顧み、また国際連盟の機構によって中東における平和と秩序との維持」することを目的としながら、国際連盟規約ならびにパリ不戦条約に基づく世界平和に寄与しようとする意向を表白しているのであります。それでありますから、このサ条約にはアジア協定と呼ばれるようなアジア的主体性は、その締約国が西角^{ウエスト}アジア的性格の国家である点をのぞきますと、きわめて薄弱なのであります。そこには締約年月日が「一三五六年ヂユマターダ・アル・アウワ

ル第一七日」という日付になっているところを看過するものにとつては、ほとんど回教的雰囲気さへも感得しえられません。ここに、われわれが深く考えさせられる問題があります。しかも、これらの四国を核心とする回教的生活空間は、かつての「古い中世」のころとは別問題であつて、今日世界的使命を自覚する有力な指導民族をいまなお育成しておりません⁽³³⁾。

ところで、日中戦争勃発後、守屋和郎公使の代理であつた桑原鶴・臨時代理公使が公機密第九三号として一九三八（昭和一三）年四月五日に次のような国際情勢の一変振りを本省の広田弘毅外務大臣宛に伝えている。桑原臨時公使は、日中戦争勃発前には英ソ兩國との関係はまだそれほど緊張していなかつたために、両国と対抗するためにアフガニスタンと親交を結んでその助力を求め余地もあつたが、ここに至つて国際情勢はあまりにも深刻化してしまつたので「我方ノ大陸政策遂行ノ為ニ当国（アフガニスタン）ヲ利用スルコトハ極メテ困難トナリタリト言ハサルヲ得ス」というきわめて否定的な結論を導き出しているのである。

「右ニ依リテ明ラカナル如ク当国ノ地位ハ日支事変ニ依リテ全ク一変セリ。事変前ニアリテハ英蘇兩國ト当国トノ関係未タ非常ニ緊張シ居ラサリシ為、我国トシテハ蘇連邦ノ新疆方面ノ活動ヲ監視シ旁、蘇聯邦内部ノ情勢ヲ探ル為、当国ト親交ヲ結ヒ之カ助力ヲ求ムルノ余地存セシモ、現在トナリテハ国際情勢ハ余リニ深刻化シ過キタリ。各種情勢ヨリ判断スルニ、我方ノ大陸政策遂行ノ為ニ当国ヲ利用スルコトハ極メテ困難トナリタリト言ハサルヲ得ス。寧ロ当国ノ立場ヨリ言ヘハ、英蘇カ日本カ新疆方面ニ進出スルヲ恐レテ、日本ノ新疆方面ニ進

出スル以前ニ当国ニ対シテ執ルコトアルヘキ決定的措置ヲ極度ニ恐レ居ルモノナルヲ以テ、日本カ英蘇ノ機先ヲ制シテ既成事実ヲ作り、英蘇カ当国ニ対シテ決定的措置ヲ執ルコト不可能ナラシムルコトヲ望ミ居ル状況ナリ。」⁽³⁴⁾

さらに、以下のように親日的な「ジェスチャー」が表面からだんだん姿を消しつつあるという観察の下に、対日関係は「不即坦白」な状態に置こうとしているかのようだとして、あまりアフガニスタン政府にあれやこれやと付き纏つて、かえつて苦しませるような結果にならないようにと注意を呼びかけて、アフガニスタン対策は常に世界政策の一環として考慮する必要があると提言して、次のように述べるのである。

「斯カル次第ナルヲ以テ一時盛ナリシ親日依存ノ「ジェスチュア」ハ漸次表面ヨリ其ノ姿ヲ潜メタリ。茲暫クハ困難複雑ナル国際情勢ニ処シテ日本トノ関係ハ成ルヘク不即坦白ナル状態ニ置カントスルモノ如シ。我国ニ第二回ノ留学生ヲ送ラザルモ之カ為ナルヘク、邦人技師ノ雇入等モ今後ハ恐ラク差控フルニ至ラン。従テ我方トシテモ能ク此ノ間ノ事情ヲ了解シ、徒ニ紙上ノ「アルターネーティブ」ヲ追ヒ、彼ノ手此ノ手ト当国ニ付纏ヒ、却ツテ当国ヲ苦シムルカ如キ結果ニ陥ラサル様充分ノ注意肝要ト存セラル。殊ニ我方大陸政策遂行ノ進展ニ伴ヒ如何ナル緊張セル事態ヲ誘致スルヤ、今俄ニ逆賭スヘカラスト雖、対当国策ニ関スル限り常ニ我国世界政策ノ一卷トシテ考慮スルヲ要シ、以テ国家百年ノ計ニ違算ナカラシメンコトヲ期スヘキナリ。思付ノ儘」⁽³⁵⁾

桑原臨時公使が送った以上の報告は尾崎三雄が帰任するよりも半年弱前に過ぎない。つまり、現場の公使館は日中戦争が勃発した以上、アフガニスタンとの関係を強化することは難しいと反対している。尾崎三雄が帰任する一九三八年九月にはアフガニスタンにおける日本外交の現場では、アフガニスタンを通じて対英ソ工作を行うのは極めて困難になりつつあったとの現状認識をもっていったことになる。したがって、尾崎の後任として日本から農業技師を派遣する話もうまくいかなかったところである。

ところが、アフガニスタンでの外交の現場で日本との関係が冷却しつつあったという厳しい状況認識とは裏腹に、日中戦争後の一九三八年という年には日本において回教・回教徒研究の組織化が活発化して、回教圏研究所、大日本回教協会、東亜経済調査局回教班、外務省調査部回教班、あるいは本論でも触れた東亜研究所などの研究機関が雨後の筍のように設置されるのである。³⁶⁾換言すれば、ことアフガニスタンに関するかぎり、出先機関のある公使館という現場と本国との間の時差に伴う回教・回教徒研究の体制確立のタイミングのずれがあらわれるのである。

むしろ、ある意味では戦時期における徒勞といってもいい回教・回教徒研究の機運の盛り上がりは一九四五年八月十五日の敗戦とともにほぼ完全に途絶えてしまう事実と呼応している。いかに研究体制の確立が場当たり的なものであったかの証左であるからである。そのような抜本的な反省はあまりなされないまま、このような回教研究にまとわりつく体質は戦後においても地域研究としても継承されていくことになる。³⁷⁾

もちろん、アフガニスタンは第二次世界大戦中、日本に対しては中立を保ち、在アフガニスタン日本公使館も存在した。とはいうものの、それはあくまで形式的なものに過ぎず、実際的には大東亜戦争の勃発と

もに、その両国関係は事実上、途絶したかたちになり、外交官もすべて引き上げたのである。このような日本と中東イスラム諸国との相互関係はアフガニスタンだけには限らないというのがこれまでの歴史が示すところである。

【注】

(1) 尾崎三雄は一九〇二年十一月六日、山口県山口市に生まれ、東京帝国大学農学部農学実科卒業後、農商務省に入省した。一九三五年から害虫駆除などの農業指導のためにアフガニスタン政府から招聘されて約二年間夫人とともにアフガニスタンのカーブルに滞在した。帰国後の一九四一年七月には海軍省嘱託、四三年陸軍省技師として食糧自給対策および指導に当たって敗戦を迎えた。戦後は五九年まで山口県農業試験場長を務めたが、八五年に逝去した。しかし、尾崎は戦後、アフガニスタンについて語ることはほとんどなかった。アフガニスタン滞在中に撮影された写真、日誌、フィールドノート、収集された書籍・雑誌などの多くの資料が尾崎家に残されている。なお、尾崎家所蔵の資料に関しては科学研究費基盤研究(A)「日本・イスラーム関係のデータベース構築—戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開」(平成一七〜一九年、研究代表者 白杵 陽)の研究プロジェクトの一環として整理してデータベース化を行っている。本論文も同科研究費による研究成果の一部であることの特記する。

(2) 尾崎三雄「農業を通じて見たるアフガニスタンの断片」『回教圏』第三卷第六号、一九三九(昭和一四)年十二月一日、二一〜四頁。

(3) 尾崎三雄「農業を通じて見たるアフガニスタンの断片」『回教圏』第三卷第六号、一九三九(昭和一四)年十二月一日、二一〜三頁。(原文における旧字体・旧仮名使いは引用者が現代仮名づかいに改めた。以下においても同様)

(4) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. A03021829300 (第二〜三番目の画像から)「御署名原本・昭和六年・条約第五号・日本国アフガニスタン国間修好条約」、内閣、国立公文書館・アジア歴史資料センター。

- (5) 村田昌三『アフガニスタンを繞る列強の争覇』東亜研究所資料乙第三八号C、昭和一六年五月、一〇二頁。
- (6) 守屋和郎『アフガニスタン』新東亜風土記叢書(六)、岡倉書房、一九四一(昭和一六)年、二六六頁、二五四～二六〇頁。
- (7) 同上書、二五九～二六〇頁。
- (8) この論文は『中央公論』昭和一三年六月号および七月号に掲載されている。なお、この文章は坪内祐三編『文藝春秋 八〇年傑作選』(文藝春秋社、平成一五年三月、一五四～一六六頁)に再録されている。
- (9) 大久保幸次「回教徒問題」『アジア問題講座』第三卷「政治・軍事篇(三)」、昭和一四年八月、弘文堂、二四七～二六七頁。
- (10) アルフレッド・ハドソン、エリザベス・ペーコン、研究調査部訳「今日のアフガニスタン」『回教圏』第四卷第四号、昭和一五年四月、五八～六五頁。
- (11) 小川亮作「カブール綺譚二篇」『回教圏』第七卷第一号、昭和一八年一月、一七～二九頁。
- (12) 前田耕作監修、関根正男編『日本・アフガニスタン関係全史』明石書店、二〇〇六年、六三頁。
- (13) 白杵 陽「大川周明のイスラム論―日本的オリエンタリストのまなざし」『季刊 日本思想史』第七二号、二〇〇八年一月、一三〇～一五二頁を参照されたい。
- (14) 尾崎三雄「現代アフガニスタンの構成」『新亜細亜』第一卷第二号、一九三九(昭和一四)年九月、一二九～一四〇頁。
- (15) 二四四～二四五頁。
- (16) 同上書二四五頁。
- (17) 松島 肇『東半球における防共鉄壁構成と回教徒』大日本回教協会、一九三九年三月、一二～一三頁。
- (18) 松島 肇『大日本回教協會の使命に就て』第三号、大日本回教協會、一九三九年一月、七頁。
- (19) 東亜研究所における「第五部二班西アジア」に関しては原覺天「現代アジア研究成立史論―満鉄調査部・東亜研究所・IPRRの研究―」(勁草書房、一九八四年、一二一～一二三頁、を参照。
- (20) 村田昌三『印度・アフガニスタン国境―その紛争と民族』東亜研究所資料乙第三七号C、一九四一(昭和一六)八月、一頁。
- (21) 同上書、一頁。
- (22) 村田昌三『アフガニスタンを繞る列強の争覇』東亜研究所資料乙第三八号C、一九四一(昭和一六)年五月、「はしがき」。
- (23) 原前掲書、一六五頁。
- (24) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B02031546700 (第六番目の画像から)「二昭和九年六月二十五日から昭和一二年八月十八日」、外務省記録、国立公文書館・アジア歴史資料センター。ただし、句読点は引用者が付加。また、丸カッコ内の「脱」は原文のまま。丸秘電文からの文字の脱落か。
- (25) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B02030860000 (第四番目の画像から)「AF阿富汗斬且／アフガニスタン、英国間」、外務省記録、国立公文書館・アジア歴史資料センター。ただし、句読点は引用者が付加。
- (26) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B02031849600 (第一～二番目の画像から)「一昭和一一年一月二日から昭和一一年一月二十一日」、外務省記録、国立公文書館・アジア歴史資料センター。
- (27) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B02031849600 (第一番目の画像から)「一昭和一一年一月二日から昭和一一年一月二十一日」、外務省記録、国立公文書館・アジア歴史資料センター。ただし、句読点は引用者が付加。
- (28) 同上資料。
- (29) 同上資料一六番目画像。
- (30) 同上資料。
- (31) 同上資料第一七番目の画像。
- (32) Hillgruber, Andreas, "The Third Reich and the Near and Middle East, 1933-1939", Uriel Dan, ed. *The Great Powers in the Middle East, 1919-1939*, New York and London: Holmes & Meier, 1988, pp.278.
- (33) 小林 元『回教圏の課題』ラジオ新書一〇〇、日本放送出版協会、昭和一八年五月、一四五～一四六頁。なお、小林の評価に関しては、白杵 陽「日本における現代中東イスラーム研究の源流―小林元(一九〇四～一九四四年)とその時代―」『史艸』第四七号、日本女子大学史学研究会、二〇〇

- 六年十一月二十五日、九四～二二頁、を参照されたい。
- (34) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B0203086000 (第二十一～二十二番目の画像から)「A F 阿富汗斬旦／一アフガニスタン、英国間」
外務省記録、国立公文書館・アジア歴史資料センター。
- (35) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B0203086000 (第二十二番目の画像から)「A F 阿富汗斬旦／一アフガニスタン、英国間」、外務省記録、国立公文書館・アジア歴史資料センター。
- (36) 白杵 陽「戦前日本の『回教徒問題』研究—回教圏研究所を中心として」『岩波講座「帝国」日本の学知 東洋学の磁場』第三卷、岩波書店、二〇〇六年五月 二一五～二五一頁。
- (37) 白杵 陽「戦時下回教研究の遺産—戦後日本のイスラーム地域研究のプロトタイプとして」『思想』第九四一号、岩波書店、二〇〇二年九月、一九一～二〇四頁。